ストリートソング

新参

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ストリートソング

【Ｎコード】
Ｎ０５９３Ｚ

【作者名】
新参

【あらすじ】
狸小路の商店街を中心に、人それぞれの視点で物語は進みます。女子高生、千歳はデコレーション年賀状を通して恋をつかみとれるのでしょうか？
狸小路で歌う一人の少年。彼は誰に歌を贈り、何を伝えたいのでしょうか？
先日書かせてもらった「ビジネスソング」の登場人物のその後も少し見えてきますよ。

In the case of Shinji（前書き）

初の連載です。
といっても、短編の集まりです。
時間系列がとらえにくいかもしれませんが、ご了承ください。
コメントいただけると、作者は喜びます。
なんてね。

In the case of Shinji

例年より早い冬の訪れは行き交う人の流れを早くする。

札幌駅のガラス張りの壁に吊るされたポスターには「冬先取りセール」なるものが題打ってある。

買い物客は休日ということもあり、カップルだらけである。

カップルを見ていて思い出したのだが
巷では「リア充爆発しろ」つまり「現実(リアル)が充実しているやつはいなくなっちまえ」という妬みのような言葉が流行っているようである。

だが、この場でそんな惨事が起きたら大変なことになるだろう。

というか、自分が「リア充」じゃなくとも、その爆風で自分も巻き込まれるんじゃないか？

と考えられる今は、至って平凡で平和な日々が続いている。

伸二はいつものごとく、一回のパン屋でマフィンと牛の描かれたヨーグルト風味の飲み物を買い、最近新しくできたという地下の遊歩道へと向かった。

その遊歩道では市が開催している展示や、ストリートパフォーマーなる者もいて賑わいを見せていた。

午後8時、その時間が近づくまで伸二はこの辺りで時間を潰す。

伸二は別段変った風ではなく、音楽を聴いたり、大通り公園の噴水をただ黙々と眺めていたり、狸小路のお店をぶらぶら散策したりして時間を潰す。

今日は寒いからあまり人は止まらないかもな、そんなことを考えながらパンをモシャモシャと噛みしめ、その時間を待った。

In the case of Chitose（前書き）

場面が変わって…

In the case of Chitose

昨年辺りから、デコレーション年賀状が高校生の間で流行っている。

はがきにビーズやマニキュア、あるいは折り紙などを使ってきらびやかに彩る。

あまりに凝っているものは、はがきとして認められず、結果的に普通郵便として封筒に入れて送る強者もいるらしい。

千歳はその波に乗っかるべく、ペンギンがマスコットキャラクターの、安いことで有名な大型量販店に足を運んだ。

「今年はどんなカンジにする？」

一緒に買い物に来た亜紀が、千歳に訊ねる。

去年、デコレーション年賀状を教えてくれたのも、彼女である。

「まだたいしたアイディア浮かばないんだよね」

「でも去年、初めてなわりにすごかったじゃん」

確かに自分でも納得のいく出来だった。

なにしろ、作った相手は自分の想い人なんだから。

…なんて言うと自分のキャラにあっていない。

その想い人というのは…

最初はこいつ面白いやつだな、という程度。

どっちかというと、ムードメーカーで「いじられる」ポジションにいる。

そのお調子者を気になり始めたのはいつからだったか覚えていない。

ただ…

ただ、確かなのは、自分の気持ちは伝えられていないままだし、今も千歳は気になっているということである。

自分で言うのもなんだが、私の性格はサバサバしているほうで、あまり他人に興味がない。

自分から他人と関わる必要もないし、必要があれば話す。その程度でいいと思っている。

と、千歳は自己分析する。

亜紀に関しては小学校から高校まで同じ道を歩んできていて、お互いを理解しあっている。

と、千歳は思っている。

ただ、亜紀は流行に敏感で誰よりも先に、そして目立つことが好きな子であるため、その部分に関してはあまり踏み込まないようにしていた。

…この年賀状までは。

ペンギンに見送られ、大型量販店を後にする。

狸小路に出たところで亜紀が千歳に話しかけた。

「まだ時間あるし、どっか寄ってから帰らない？」

時計を見れば、まだ6時にもなっていない。

たぶん母親が帰ってくるのは7時を過ぎるだろうから、夕食まで時間はある。

ちょっとしたおしゃべりを楽しむために、二人は、ジャズの流れる少しおしゃれな雰囲気のカフェに入った。

そこは昼から夕方にかけてカフェ、そして夜はバーとして営業しているお店であるようだった。

席に着いたところで亜紀は、唐突に話し始める。

「ところで、最近どうなの？」

「何のこと？」

千歳は何について聞かれているのか分かっていたが、あえて濁した。

「何って、修輔君のことしかないでしょう」

亜紀は濁したことをばっさり切るようにその名前を出す。

「最近どうも何も、あたしは関係ないもの」

「嘘は自分を嫌いにするだけだよ」

なかなかこの子は遠まわしに且つ的確に私を追い込むようだ、と千歳は顔をしかめた。

「去年のリベンジができるといいわねー」

なんて、簡単に言ってしまうような亜紀が、このときばかりは羨ましかった。

自分にとって、時間はなんてことなかった。

好きになる理由なんてたくさんあるのだ。

たぶん、私が職員室にホームルームで使った進路の資料を四苦八苦しながら運んでいたときに「手伝おうか？」と声をかけてくれるような人だから。

たぶん、1年生からレギュラーで、サッカー部では期待のルーキー。3年生にとって最後の大会ももちろん出場。
残念ながら、予選敗退だったけど「先輩たちの方が辛いから」と言って一切泣かないような人だから。

たぶん、サッカーが大好きで本当に一途な人だから。

私が隙入る暇もないほど。

In the case of Chitose 2（前書き）

In the case of Chitose からの続きです。

In the case of Chitose 2

何かきっかけがあれば

その一歩が、この年賀状だったのである。

去年の今頃も豪華に着飾った年賀状を作った。

製作時間とアイディアのコストパフォーマンスを考えると、あまり数は多く作れないので、亜紀の分と、そして修輔の分だけを作った。

そのときの千歳は内心うまくいくと思っていた。

普段、修輔とうまく話せているし、なんだかんだあっちも好意を寄せてくれているんだと思っていた。

案の定、その自信作を郵便局には持っていったが、ポストには投函できなかった。

ビーズで凸凹していたり、はがきの大きさを上回っていたりする装飾は受け付けてもらえなかった。

封筒に入れて送るという手もあったが、改めて考えると、修輔の両親にこの年賀状は見られたくない。恥ずかしすぎる。

千歳の家と修輔の家は、さほど遠くもなかったので届けようと思えば届けられる距離である。

ただ、年賀状を渡すだけでは味気ないので、千歳は初詣に誘うことにした。

千歳にとっては一大決心である。

そこで渡して…、とにやける自分が気持ち悪い。

キャラに合わないことはするべきでない、と自分を律し布団に入った。

現実、そんなに甘くなかった。

冬休みに入る前の最後の登校日、千歳は1人になった修輔を捕まえて、例の件に誘った。

ところが、修輔は千歳の斜め上の答えを返した。

「ごめん、お正月も自主トレするからさ。そういう時間ないわ」

頭の中が真っ白になった。

「あ、そうか」と気の抜けた返事をして、そのあとは何も覚えていない。

修輔もすぐにいなくなり、千歳は一人で家に帰った。

千歳は久しぶりに泣いた。

なんで？

自主トレとか言って、初詣に回るくらいの時間もないの？

普段はあんなに、おちゃらけているくせに…。

一緒に初詣を回る想像した自分がすごく恥ずかしく

自分に少しでも好意があると思っていたのは妄想だったという自分が悲しく

相手を責めることしかできない自分が嫌になり、千歳はまた泣いた。

年賀状は渡しそびれた。

当たり前である。

どんな顔で渡せばいいのか。

そのときの千歳には全く分からなかった。

In the case of Shinji（前書き）

コロコロ場面は変わるのです。

In the case of Shinji

いつもと同じ場所。
いつもと同じ時間。

商店街のシャッターが下りる頃、伸二は動きだす。
まず、ぼろぼろになったギターケースから自慢のギターを取り出す。
2年前、その日から一緒に奏で、歌い続けてきた相棒である。

チューニングを済ませ、ひとまずケースの上に乗せておく。
譜面台をリュックの中から取り出し、自作の楽譜を載せておく。
そして、友人に作ってもらった『しんじ』と大きく書かれた、手作り感あふれる看板をギターケースに立てかける。

ちなみにこれは、以前酔っ払いのおじさんに折られてしまったので、2代目である。
隅っこの方にはしっかりと『酔っ払い反対！！』だとか『暴力反対！！』と書かれている。

声の調子を量るために、少し声を出してみる。

うん、良い調子じゃないか？

ここまではいつもと同じ調子。

あとは特別な来客を待つばかりである。

とはいえ、その人物が来るまで時間があったので、伸二は声だしの意味も含めて、何曲か歌うことにした。

歌い始めようとしたとき、まだ若いサラリーマン風の男性と女性が立ち止まってくれた。

伸二は彼らに軽くお辞儀をし、ギターをかきならし始めた。

よし、良い感じだ。

ギターの音色に乗せて、伸二は歌声を狸小路の商店街に響かせた。

In the case of Shinji（後書き）

まだまだ続きますよ

In the case of Chitose3

ぎくしゃくしたままの関係が、半年近く経った。

その間も相変わらず気さくに話しかけてくる、修輔の優しさが今の千歳には痛かった。

まだ冬休みが明けて間もないころは、狸小路で同い年のギター弾き語りがいるから注目しとけよ、だとか。

今歌を悠長に聴いている気分じゃありません。

今年は先輩が少ないから、がんばらなきゃいけないだとか。

先輩少なくたってあんたが何とかしなさいよ。

春先になれば、背番号がもらえただとか。

あんたなら当たり前でしょ。

テスト追試だらけになりそうでやばいとか。

知らん、いつも練習ばっかりで何にもやってないからでしょうが。

休んでるとこ見たことないし。

せっかくあいつは話しかけてくれるのに。

特に気にすることはない、と言い聞かせても、奈何せん千歳には悪夢がよみがえる。

そんなと吹き荒れる千歳に訪れた小さな出来事。

5月の後半に差し掛かったときの放課後、千歳は修輔に次の土曜日の試合を見に来るよう誘われた。

最初は戸惑ったが、もしかしたら仲直りができるチャンスだと千歳は思った。

亜紀についてきてもらうことで、一緒に行くことにした。

当日、千歳の目には右往左往しながらボールを追いかける修輔しか映らなかった。

しかし、結果は3—0で千歳の高校が敗北。

ディフェンスラインからあっさり崩され、同じようなシュートが3回決まった。

試合後、修輔たちのチームはスタジアムの外で集まっていた。

修輔は口を一文字で結び、何もしゃべらなかった。

千歳は「お疲れ」と一言、声をかけたかったが、そんな雰囲気ではなかった。

千歳たちに気付いたのか、修輔はこちら側に走ってきた。

「来てくれてたんだな。本当にありがとう」

たぶん、修輔にとって最大限の笑顔だろう。

少しひきつったような、目の奥に悔しさを携えた笑顔である。

「いやー、惜しかったわね。ゴールポストに嫌われたというか」

いつもの調子と変わらない亜紀の様子に、少しだけ修輔の顔が和らいだ。

千歳もコクコクとうなずく。

「情けない姿見せちゃったかな」

「そんなことないよ！！」

自分でもびっくりするくらい、鋭い声が千歳から出た。

「…かっこよかったよ。お疲れ様」

千歳はやっと自分の言いたいことが言えた気がした。

少し紅くなったのは気のせいである。

「あんたには来年もあるのよー」

亜紀が語尾を伸ばして修輔を励ます。

しかし、その言葉に修輔は視線を落とした

「もう、来年しかないんだ」

修輔はゆっくりと千歳たちから顔をそらした。

そして、「今日は本当にありがとう、気をつけて帰ってね」とだけ残し、チームの輪の中に戻って行った。

あいつ辛くたって泣かないもんな

大丈夫かな、自分のことばかり責めてないかな

ってか、さっきからあいつことしか考えてないぞ？

やっぱりあたし修輔のこと好きかも。

修輔の中に今はいなくても、いつか心片隅にでも残るように…。

「いいよ、千歳。その心意気が大切だよ」

いきなり話しかけてきた亜紀の声が千歳を現実に引き戻す。

帰りの地下鉄はガタゴトと音を立てながら暗闇の中を駆け抜けて

いく。

「え、何のこと？」

「今乙女の目になってたよ。修輔のことやっぱり好きかも…みたいな？」

「い…いや、はぁ？そんなことないし！！」

何でそこまで分かるかなぁ

あまりに鋭いこの友人の前では恐る恐るだが、千歳は今後の青写真を想い描いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0593z/

ストリートソング

2011年12月11日13時51分発行